

# 院外茶話

vol.109 平成 26 年 6 月 1 日

平均寿命と健康寿命  
延命と救命  
身体は少しずつ壊れていく  
その先を考えておかななくては

## 老いのゆくえ



日本の医療がおかしくなり始めたのは、バブルが崩壊した頃からだった。

毎年医療費が減額されて、病院も病人もずいぶん無駄を削ったけれど、そんな節約を上回る勢いで、日本は高齢化社会に突入した。高齢者が増えれば、医療費が増える。10年くらい前には30兆円で、パチンコ業界と同じ規模と言われたものが、もう40兆円になる。

このままでは保険診療が破綻するかもしれない。救急車も不足して、毎回高齢者の軽いめまいに出動していたら、現役世代の心筋梗塞に手が回らない。80代の病人と40代の病人。命の価値を比べることはできないけれど、そこには常識的な線があるだろう。

そうかと言って、どこかの医療費を削れば、そこの命を削ることになる。だから削る部分が決められない。そこで、満遍なく予算を削ってきたが、それも限界に近づいた。

こうして見ると八方ふさがりのようだが、そこには逆転の解決策がないでもない。誤解を生みやすい内容なので、なかなか口にする人がいなかったが、ここにきて、ようやくその言葉

が聞こえるようになった。

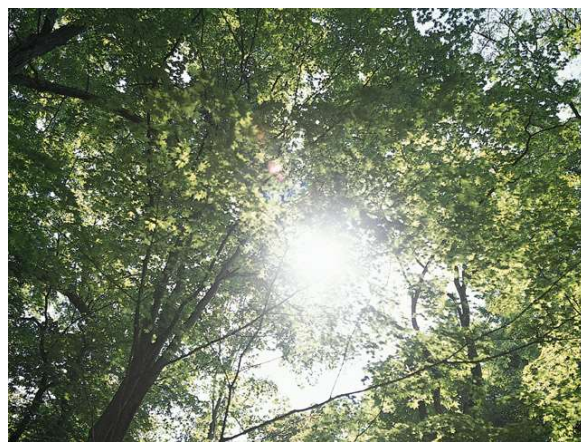
それは尊厳死である。

回復の見込みがないのに、管だらけになって、病室に寝かされた状態をスパゲティー症候群と言う。こんな不気味な医療や、むりやり流動食を口に入れる高齢者の介護には、誰もが矛盾を感じていた。

医療はもちろん病人を救うものだけど、苦痛を感じるだけの余生を作るならば、あるレベルで退かなければならない。

認知症になって家族の区別もつかないまま、生き続ける父を見た時も、脳動脈瘤の破裂から回復をして歩けなくなった母を見た時も、そう思った。

人の生死が歪んできた。



21世紀に入ってようやく、医療の見直しが始まったが、この問題は一つ言葉を間違えると、袋叩きにあう。上げ足をとられぬよう、話はものすごく慎重に進んできたが、もう少し大胆でもよかったと思う。

日本中が不老長寿を目指したのは、人がみな短命だった時代。命を粗末にするわけではないが、今は長生きの恐怖を語る人の方が多い。

実際、超高齢者になれば多くは寝たきり、またはそれに近い状態で暮らす。それも、ただ寝ているだけではない。痛みや孤独、人には言えない悩みを抱えた寝たきりで、ここに重大な病気が重なれば、絶望の余生が残るだけ。

これが尊厳死の検討を始めた最大の理由であるはずだが、経済的な背景があったことも事実である。

5%くらいの人が高額の医療を受けて、大半の医療費を使ってしまうので、大多数の人は大きすぎる負担を強いられる。尊厳死が普及をすれば、こんな医療費も大幅に節約ができることになるので、これが表に出ないもう一つの理由になる。

フランスやドイツでは、尊厳死の法制化が進められ、ベルギー、オランダはもう一步先の安楽死が現実となる。



日本も近い将来、後に続くことになるだろうが、この問題は医療や経済の背景をもつ一方、個人の生き方の問題でもあるので、画一的な制度を作るのは難しい。

最大の懸念は、日本人にありがちな考え方で、他人に迷惑をかけていると、生きていることが悪いことかのように感じる人が出てきしないか。

それでも、本人の意志がはっきりしていればいい。家族が尊厳死の決断を迫られると、それはとても重苦しい判断になるだろう。尊厳死に反対をすれば、苦しむだけの余生を作る。そうかと言って、表立って親の死に賛成をするのも難しい。

制度はともかく、もし自分がその立場におかれたらどう思うか。

「一人で食べられない」、「一人で下の始末ができない」という生き方は耐え難い。改善の見込みのない痛みも我慢ができない。

思いつくままに、一つ一つの状況を上げてみれば以下の通り。

×は耐えられない。○はOK。△はその場になってみないとわからない。

- 挿管 . . . . . ×
- 寝たきり . . . . . ×
- 胃瘻 . . . . . ×
- 経鼻栄養 . . . . . ×
- 尿道カテーテル . . . . . △
- おむつ . . . . . △
- トイレにいけない . . . . . ×
- 食事ができない . . . . . ×
- 見えない . . . . . ×
- 聞こえない . . . . . ○
- 話せない . . . . . △
- 歯がなくなる . . . . . ○
- 痛い苦しい . . . . . ×
- 動けない、歩けない . . . . . ×

これは今の自分の判断であって、○や△がいくつか残っているが、もし20年前に同じ項目を見たら、全部×としたらう。

反対に20年後だったらどうか。平気でおむつをしているかもしれないし、「聞こえない」、「話せない」環境の中で、ひどい孤独感を味わっているかもしれない。



受験も結婚も出産も、大きな目標を前にすれば、誰もが周到な準備をする。それが嫌なら全部やめてしまうこともできるが、死は必ず訪れる。

それは誰もが迎える人生最大の舞台で、身体も心もその日に備えて、ソフトランディングの準備をしておきたい。

身体の始末は終末期医療やホスピスの問題で、一人の力ではどうにもならない。しかし、心の準備は誰に相談しようが、正解をくれる人はいない。最後は自分一人で決めること。

その時は、どうしようもない自分自身をあっさり笑い飛ばして、あっちにでかけるだけの覚悟をしておきたい。